新聞学科創立75周年記念シンポジウム
「グローバリズムの進展とアジアのジャーナリズム」

開会挨拶

橋場義之（新聞学科長）

時間も参りましたので、そろそろシンポジウムを始めさせていただきたいと思います。開始に先立ちまして一言ご挨拶させていただきます。新聞学科長の橋場でございます。どうぞよろしくお願い致します。皆様、今日、東京は木枯らし一番が吹いたとかで、かなり寒くなっておりますが、わざわざシンポジウムのためにお越しいただきまして、本当にありがとうございます。お配りしましたパンフレットを開いていただきますと、「新聞学科の歩み」が書いてございます。新聞学科という名前で設立した学科としては、日本で初めてであります。詳細はこの「歩み」のところを見ていただくとお分かりになると思いますが、当時の時代背景を振り返ってみますと、専門部新聞学科の開設が1932年で、その７年前の1925年は、日本でラジオ放送が始まった年でした。

また32年という年は、第一次上海事変が起きた年でありますし、翌年の33年には、本日、基調講演をされる中馬清福さんの新聞社『信濃毎日新聞』が「関東防空大演習を嗤ふ」という社説を書いて軍部から睨まれて問題化したなど、かなりきな臭くなっていた時代でした。

当時、新聞学科は新聞記者養成を掲げて発足したわけですが、新聞がメインであることはその後も間違いないものの、ラジオの普及、そして戦後のテレビの普及、そして今やインターネットが広まり、メディア環境は大きく変わりました。新聞学科もそれに応じて、ジャーナリズム教育、マス・コミュニケーション教育と軸足を移しつつやってきております。

インターネットの爆発的な普及や広がりは、グーテンベルクの活版印刷の発明と同じくらい大きな影響を社会に与えているとも言われております。そのような時代に新聞学科という学科の役割の重要性を改めて見直さなければ

いけないと私どもは考えております。特にジャーナリスト教育というのは当初専門学科としてスタートした時に掲げた目標でもありますので、私どもも改めてこのことを大きな課題の一つとして捉え、学科の役割の一つとしてどのように引き受けていけるのか、ということも考えなければならない時代に来たと自覚しております。

このようなことを踏まえ、インターネット等がもたらしたグローバリズム、という大きなメディア環境の変化の中で、アジアのジャーナリズムを考えようというのが今回の企画でございます。どうぞ皆さんご一緒に、このテーマについて考えていただければ幸いです。新聞学科という名前は今や日本では上智と日本大学にしかなくなってしまいましたが、新聞というものを広い意味で「ニュース」と考えていけば、新聞学科はジャーナリズムの役割を考えていく上で重要な大学教育の場であると認識しております。今後とも皆様の一層のご指導ご鞭撻を改めてお願いしたいと思います。では、基調講演に移らせていただきます。中馬さん、よろしくお願い致します。